

第3図 莢の発病率，発病程度及び種実の発病率
黒棒は緑色のもの，白棒は枯れたもの

い。茎が黄色になつたものでは4~7日後には水浸状の初期病斑が認められた。

以上のことから，本病の茎での発生は毛茸或は他の部分にある病原菌が茎の登熟を俟つて侵入し，発病するものと思われる。

摘 要

- 1 ダイズシハン病の茎における発生についての調査結果を報告した。
- 2 茎での発病は8月下旬頃から認められ，収穫期にあたる9月中旬頃が最も多く，9月下旬以降では発病は少ない。
- 3 茎の病斑は下部に多く上部ほど少ない。
- 4 品種との関係についてみると，早生種に多く，9月以降成熟するものでは発病しない。一般に成熟期の早いものほど発病が多い。
- 5 茎での発病は莢や種実よりもおそく行われる。そして莢や種実の本病に対する抵抗性と茎での発病とは一致しない。

クワイの新病害について

笹野市蔵

(石川県農事試験場)

クワイの既往の病害としては，ハンモン（斑紋）病とカショウ（火腫）病の2種類であるが，1955年石川県河北郡津幡町に秋季からクワイの葉が褐色斑点状になつて枯死するとの報告があり，現地調査を行つたところ，既往の2種病害とは全く異なり明らかに新種であることが解つた。その後の調査では県下全般に発生していることが明らかになつた。

本病は7月下旬ごろから発生しはじめ，一般には9月中下旬ごろからであり，10月になると被害もかなり目立ってきて葉や葉柄の枯死状態をみるようになる。

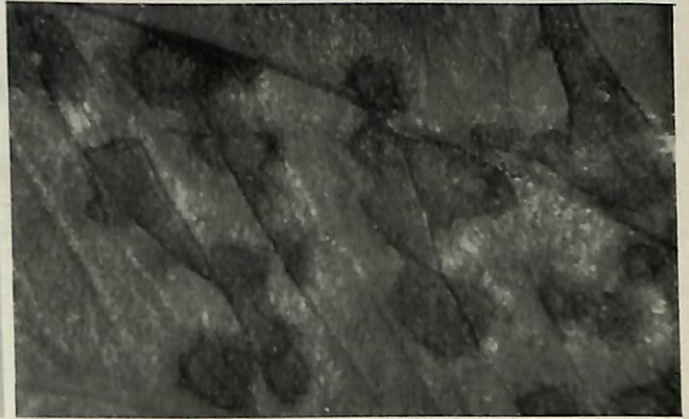
病徴は最初クワイの葉及び葉柄に淡褐色または褐色の針頭大の小斑点を生じ，それが漸次拡大して褐色から黒褐色に変わり，病斑の大きさも1~2mm程度の不正円形，葉柄では紡錘形を呈してくる。さらに，病勢が進展

すると病斑は融合して遂に枯死するに至る。なお，病勢の後期又は湿度が高い場合には病斑の中心部に灰白色の孢子層を生じ白星状になる。

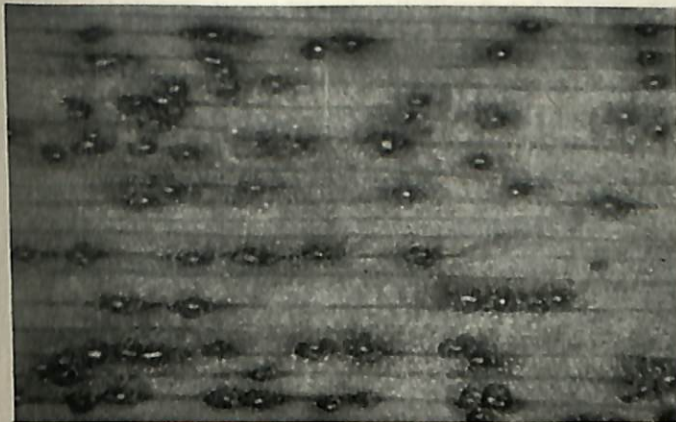
病原菌の分生孢子は無色で2胞からなり，稀に単胞のものもあり，長楕円形で，大きさは9.9~21.5×2.6~3.3, 14.6×3.1μである。本病原菌は馬鈴薯寒天培養基で容易に培養ができる。培養した孢子をポットに栽植したクワイに噴霧接種すると容易に発病する。また，水田に自生するオモダカ，アギナシにも上記同様接種するとこれも同様容易に発病する。本病原菌の適温は20~25°C近辺にあり，35°Cでは全く発育しないので比較的低温を好むものと思われる。尚，本病原菌の形態等から見ると *Marssonia* 属に入るものと思われる。



葉及び葉柄の病徴



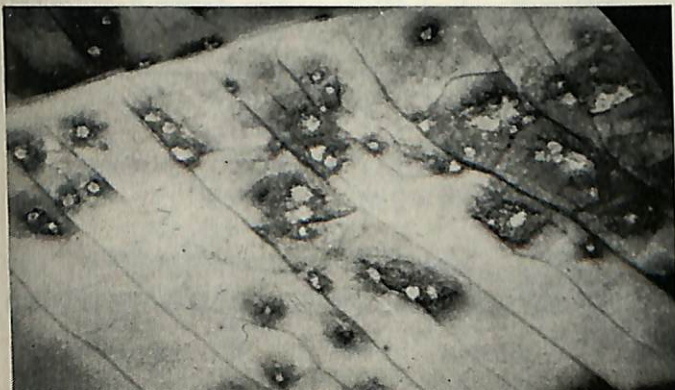
葉の病徴 (拡大)



葉柄の病徴 (病斑中心部の白色部は胞子層)



病原菌胞子



葉の病徴 (病斑中心部の白色部は胞子層)



アギナシに接種したもの (右) と無接種のもの (左)